

環境共生資源学特論Ⅱ (2単位)

担当者氏名 鈴木伸一

◆学習・教育目標 (到達目標を記載)

地球のみどりの植被といわれる植生は、動物を含めた全ての生物の生活基盤としてきわめて重要である。本特論ではこの「植生」を環境共生資源として取り上げ、生物の一員である人間と植生の関わりを通じて、現在そして今後望まれる環境共生社会の在り方について植生生態学の立場から考察したい。現代社会は球環境問題を誘発するに至っているが、その改善のための糸口が環境との共生にあるとすると、環境共生学専攻の目指す、「自然科学と社会科学および人文科学との融合による環境との共生」とは、まさに現在景観として展開されている植生の姿を素直に評価し、その背景にある人間活動の影響の検証と評価を通して、望むべき方向性を検討して行くことに他ならない。特論Ⅱでは、資源としての植生の利用について考察する。

◆取り扱う領域 (キーワードで記載)

環境保全

地域開発

自然再生

郷土樹種

環境保全林

帰化植物

絶滅危惧種

ミティゲーション

◆授業の進行等について

	テーマ	内容	準備学習(予習復習)等の内容と分量
1	緑地と植生 (第1~2週)	・生活環境資源としての植生の評価	◎本特論は環境共生資源学特論Ⅰの続編として、植生と人間との関係について講義を展開するので、人文科学的な側面にも興味を広げてほしい。◎事前にプリント配付や参考資料を紹介するので、質問などを積極的におこない、理解を深めてほしい。
2	文化と植生 (第3~4週)	・風土・民族と環境観、環境の違いと世界観、基層文化の形成と環境	
3	(第5~7週)	・人間による自然環境の改変、生物の絶滅、文明の盛衰と農業、環境問題と自然保護	
4	日本における植生景観の変遷 (第8~10週)	・都市・寺院建設と巨木林の消失・減少、はげ山の文化、アカマツ亡国論、鎮守の森と里山	
5	共生資源の循環的利用と植生 (第11~12週)	・江戸の循環型社会、農業と里山、生物多様性、里山	
6	植生管理と環境保全 (第13週)	・植生の地震や津波等の自然災害に対する耐性	
7	植生管理と環境保全 (第14~15週)	・植生復元と自然再生、管理計画とモニタリング、環境保全林、郷土樹種	

◆教科書及び資料 (授業前に読んでおくべき本・資料)

書名/著者/発行所 (発行年)

特に教科書は設けない。プリント配付等、その都度適切なものを紹介する。

◆授業をより良く理解するために便利な参考書・資料等

書名/著者/発行所 (発行年)

日本列島の三万五千年-人と自然の環境史 1~6/湯本貴和 (編) /文一総合出版 (2011年)

植生景観とその管理/中村幸人監修・日本植木協会 (編) /東京農業大学出版会 (2014年)

◆評価の方法 (レポート・小テスト・試験・課題等のウェイト)

課題レポート (100点) により評価する。

◆オフィスアワー

毎週木曜日の午後に、研究室で質問、相談等を受け付ける。

◆その他受講上の注意事項

掲示した参考書以外にも多くの良書があるので授業の中で紹介する。問題意識を持ってそれらから情報を収集してほしい。